
絆～導く二つの廻る螺旋～

綾瀬椎菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆〜導く二つの廻る螺旋〜

【Nコード】

N6435V

【作者名】

綾瀬椎菜

【あらすじ】

球技大会。

其れはスポーツ魂達がぶつかりあう場所。

注目を浴びる主人公。

何故か入れ混じるBLフラグ。

………何でこんな作品になったんだろう………

第一章へ始まりの朝は何時も非日常だから、なんとかなりませんか？（前書き）

【生^{せい}】と【死^し】

一人の人間として今まで生きてきたのなら、誰もが一度考えたことがあるだろう

不意に……そして精神・肉体が限界に近付いたときは特に……

もしかしたら【命^{いのち}】を持つものは……【死^し】を感じるときに【生^{せい}】を知るのではないだろうか……

何も無い静かな一時

そんな当たり前の事が平和だということを今まで忘れていたのかも
しれない

普通の生活

普通の出来事

朝のニュースでやっていた事件などの起きる確率は殆んど無い

異質なものなどこの世には存在しないのだから……

そんな事を思いつつ、日々の生活を少しだけ退屈に思っていた僕・氷月杏の日常は、ある日一人の少年によって非日常へと変えられてしまった。

そんな物語の第二編。

第一章　　始まりの朝は何時も非日常だから、なんとかありませんか？

プロローグ　ココロの灯火

ずっと傍に居たかった。

そんなことを、この真っ暗な闇の中で思うことがある。

動かない鉄格子を前に一つ溜め息を付き、小さく切り取られた空を見上げる。

永遠の時を生きるのもう疲れた……………

もう休みたい。

痛いのは嫌だ。

叫んでも喚いても誰も来てはくれず、わたしはこの世界で生きることを諦めかけていた。

希望の光が差し込むのを待ちながら……………

第一章　　始まりの朝は何時も非日常だから、なんとかありませんか？

好き。

大好き。

愛している。

其の言葉を初めて口に出したヒトは、一体どのような意味を込めて口にしたのだろうか？

友達・親友としての好き。

家族に向ける感情としての好き。

尊敬への思いを込めた好き。

そして……恋愛の意味での好き。

僕は恋愛感情なんて特に持っていない。

其れは昔から傍にいてくれた家族や友人のお陰だろう。

同性から異常な程に好意（≡行為？）を寄せられた経験は在るけれど、その件は見事記憶の底に封じたし。

ファーストキスは、僕の平凡な日常を変えた一人の美少……美少年によって奪われたも同然だし………（大汗）

彼に出逢って良かったことの方が多いと感じる今としては、其れも必然的なことに感じる。

只、平凡な日常を送っていたら誰かに恋をしていたかもしれないと
考えたら……いや、そもそも僕は誰かを恋愛対象に思ったこと
が無かった。

好き=【恋】では無いのだから。

じゃあ、今僕が持つこの感情は一体何処に当てはまるのだろうか…

……

取り敢えず……

「杏、現実から逃げようとするな」

「ちっ」

「舌打ちっ!?!」

『今持っている感情は、好きという感情とは全く関係ないだろうな』

因みに 『好き』と言われるより『愛している』と言われた
方が嬉しいと思うのは僕だけだろうか。

いや、そもそもそんなことを言われたことは無いんだけど。

というか、今考える事ではないな。

「……まあ、こうなるんじゃないかとは思ってたけどな……」

幼なじみの水無瀬十夜みなせとおやの呆れた声を僕は右から左へスルーする。

要するに、今起きている現状からどうすれば逃げられるかを考えるかが先のようなのだ。

非日常が悪化したあの日から二週間。

状況をなんとか乗り越えて、僕は今……指定の体操服を着た状態で私立聖桜高校のグラウンドの中心に立ち尽くしている。

真夏に近くなつた今日この頃。

父親譲りの薄い色素の髪が柔らかな風に煽られ頬を擦った。

額から滲み出る汗を手の甲で軽く拭い、僕から少し離れた対戦相手側のゴール付近に群がる人だかりを只ジッと眺めて

「……………はあ」

と溜め息を一つ付く。

何事も無かつたとは言えない状況で受けた学期末テストで、勉強付けになった身体を動かそうと学校側が考えた行事
球技祭。

今年も、避けている競技とは違う競技（今回は卓球）にエントリーしていた僕は、一緒に組んだ雪代綾兎ゆきしろあやとのミス（打った球が卓球台ではなく場外に落ちる。その繰り返し……………ある意味器用だ）で

一回戦敗退をして、水分補給をしながら綾兎と他の球技を観戦していたところに、血相を変え、息を切らせたクラス委員長がやってきた。

クラス代表のサッカーチームの一人が、試合中に相手の三年生のチームのメンバーに突き飛ばされて足を捻ったのだ。

補欠者が今日は欠席だったので、誰かが代わりに出なきゃいけないらしい。

そこで、サッカー部の次期部長・クラスのチームのキャプテンである水無瀬が僕を推薦した。

幼馴染みだから気兼ね無く誘えると思ったのだろう。

取り敢えず話を聞きながらサッカーの試合会場のグラウンドに行つて目にしたのは、ぼろぼろに負けている僕達のクラスのチームだった。

どうやら相手の三年生は、不良集団だと言われている三年F組で、審判に当たっている生徒は不良の先輩達に脅されたらしく、一寸したイエローカード（もしくはレッドカードになる出来事）を黙認しているそうだ。

頑張っているクラスメイトに対しての仕打ちとして、其れは許しがたいものだった。

怪我をしたクラスメイトのゼッケンを身に付け、チームの中に入る。

本当は……というか出来ればサッカーは避けたかったのだけど、僕

以外に代われるのは綾兎しか居なくて………一見純粹（というよりは最早天然記念物）な彼をあんな試合の場に入れるのは一寸………ね。

体育の授業の度に思っていたけど、球技のコントロールは凄く悪いみたいだし（何度か水無瀬の顔面や男の大事なところにボールをぶつけてた。僕は避けたけど）。

下手に本気を出されて、校舎を破壊されたら大変だし。綾兎は普通の人間じゃないから尚更ね。

サッカーを避けたのは、この競技とは相性が悪いからなんだけど………致し方ない。

そうして、僕は試合に望んだ。

「僕は何度も拒否した。水無瀬が悪い」

「責任転嫁するなっ！！」

隣で僕に怒鳴る水無瀬を無視し、今は人ばかりで見えないゴールの………ボールの摩擦で焼け切れた部分を見る………と言っても、視力はあまり良くないからハッキリは見えない。

「お前はもう少し力を抑えるべきだと思う」

「………あれでもかなり抑えた方なんだけど………」

ボールはゴムで出来ているから摩擦はあるだろうけど、何で焼ききれるまで至るんだろうね………ああ

「サッカーゴールのネットが華奢なのがいけないんだよ。ほら、僕は悪くない」

「んなわけあるかつ!!」

う……水無瀬のくせに生意気だと思っ。

瞬時に一喝されてしまった。

でも………久々にサッカーをやって、力をセーブ出来なかった僕にも非がある。

相変わらずの豪速球シュートを放つ事は良いことでは……無かったかもしれない。

おかげさまで、モヤモヤしていた気分はスッキリしたけれど。

「さて……と、水無瀬を弄るのは此くらいにして……取り敢えず、【ゴールキーパーをやっていた何かウザいチキン野郎】の所に一応謝りに行くっ」

勿論、本気で謝る気は更々ないけれど。

水無瀬は一つ溜め息を付いた後、ポンツと僕の頭を撫でる。

内心は【髪が乱れるから嫌】だけど、其れが多少……『気持ちいい』と思うことが1パーセントある……かもしれない。

……
…… いやいやいや、今僕は何を考えた（大汗）

「相変わらず、嫌いな人種の呼び方が凄まじいが……まあ、行ってらっしゃい」

予想外の言葉を投げ掛けられて思わずきよんとする。

「え……水無瀬は来てくれないの？」

親友を危険なところ（保健室）に行かせるつもりなのだろうか。

「だからなんで」

「幼馴染みが襲われるかもしれないのに」

「ふっ」

僕の発言に吃驚したからか、水無瀬が噎せた。汚い。

そして、僕自身思ったことを直球に言うようになったな。

「……おい、発想が突飛すぎて着いていけないんだがいや、まあ……お前ならあり得るか」

然り気無く水無瀬を巻き込む。

……確かに中学時代の暗黒期は異性よりも同性に好かれてたからなあ……今もあまり変わらないけど、避けるに越したことはない。

保健室だから尚更不安だったりする。

まあ、考えすぎなのかもしれないけどね。

で、

「付いてくるの来ないの？ …… ……来ないなら腹部に一発蹴りと結依さん（水無瀬の母親・僕の母と幼馴染み）の魔の手から逃げてきても閉め出す・相手にしないことにするから」

水無瀬を睨み付けながら少しだけ声のトーンを下げる。

水無瀬がびくつとしたのは、見なかったことにする。

「脅迫かよっ！！ …… ……つたく、分かったよ。行くよ」

おお………こういうとき、幼馴染みは助かる。

相手を大体どのくらいまで弄れば本気で嫌がるかが分かるからだ。

同性だとかこういうときは良いよなあ………

……一応否定しておくけど、僕は水無瀬に対して………その、特に愛情は抱いてない。そんなの気持ち悪いじゃないか。

「なあ、今お前から俺に対して嫌悪感らしきものが伝わってきたんだが」

「……ひゅー」

「おい、投げやりに口笛吹くなっ!」

ちっ、こういうときは敏感に反応するんだから。

「酷い……そうやって僕の自由を奪うんだ……水無瀬の意地悪」

「ぐっ……」

ぷくつと頬を膨らませながら上目遣いでそう言つと、水無瀬は慌て僕から目をそらした。

何でだろう……最近、水無瀬の視線の先に僕が居るのは気のせいだよ……?

「『其れに……どうしてだろう……水無瀬と一緒に居ると不整脈の様に胸がトクンツと高鳴る』と、氷月杏は密かに感じて

」

「ないから……って、何途中から訳も分からないナレーション入れ

てるのっ。睦月むつきっ！！」

背後から聞こえた聞き覚えのある声に、ツツコミを入れて振り返る。

其所には……………人気現役女子高生作家・あまみやむつき天宮睦月が、満面の笑みで立っていた。

「にゅっふっふっ。サッカー観てたよ。凄かったね」

にぱっつと、笑う仕草が可愛らしい　だが、内面は鬼。それも…………此の世に神様なんて居たら、神様のエネルギーを全て奪い取って当然のように神の座を手に入れることだろう。

睦月だけは絶対に敵に回したくない。

「……………ねえ、今私にとつと物凄いマイナスポイントになること考えたでしょ。このツンデレっ子め」

「マイナスポイントって何っ!？」

相変わらずよく分からない発言をする娘だ。

そして、いつの間に僕はツンデレっ子になった。

睦月は胸の辺りまで伸ばした髪を弄びながらにんまりと微笑む。

そして、何かを考える素振りをした後、右手を真上に伸ばし……………勢いよく僕に指差す。

「うん、今日から君の二つ名は『足蹴りのツンデレ貴公子』だっ！」

「「なっ!?!」」

水無瀬と僕は硬直する。

「フツ、決まったぜ……って……え? 二人共どーしたの?」

だって……その二つ名は……ねえ?

後、変に格好つけてるところが凄くウザイ。

一応詳細を聞くことにする。

「……睦月、勝手に妙なことを宣言したことはさておき、どうして其れをチヨイスっ!?!」

「え? えっと……なんとなく?」

少し戸惑いながらもそう言う睦月。

彼女の直感是一般人より鋭いのもしれない。

なんとなくで付けられた。

其れでもやっぱり……ツンデレは要らないけど。

「でも良いじゃない 一見クールに見える杏に、変わったあだ名が付けば親しみやすいでしょ?」

「いや、でも……………」

だからって、流石にツンデレを付けるのは辞めてほしい。

あ、でも……………睦月の言い分の半分はあってるか。

とある一件から、世界に興味を持たなくなっていた僕は、出来るだけ他人との関わりを避けてきた。

其れが周りには少し陰がある冷めた性格の持ち主のように見えていたのかも知れない。

実際は、只ボーツとしながら景色を眺めていたり考え事をしているにすぎなかったのだけだ。

そんな僕を変えたのは、睦月も関係している……………かな。

睦月の奇抜的な行動に振り回され、水無瀬の支えに余計な力を抜きつつ、綾兎達に巻き込まれた非日常な生活が……………少しずつ僕の氷の心を溶かしていった……………

今では此の世界での毎日が少しくすぐつたくて……………だからこそ僕は

「そして、文化祭で可愛いメイド服を着て微笑めば……………にゅふふふふ」

そう、文化祭で可愛いメイド服を着て微笑んで

え

「っ!?!? 僕に何をさせたいんだっ!?!」

予想外の発言に声を荒くする僕。

前言撤回。睦月は僕の人生を振り回す危険因子だ。

其れでも彼女は言葉を紡ぐ。

「更に、ちよつと意地悪な水無瀬にでも襲われ

っ!?!?」

すばんっ

大事な何かを犯される前に睦月の声をシャットアウトしようとした時、キレの良い音が辺りに響き渡った。

音源を辿りながら視線を動かすと……………

「痛　　っ、何するのよ……………水無瀬」

「杏で変な妄想するな。犯罪者」

水無瀬は睦月をどこから取り出したのか『ここぞの時に使おう・インスタント　ハリセンっ!?!（と、タグに書いてあった）』で叩いたらしい……………ツッコミ以外に使用できないようなモノを、どうして水無瀬は持ち歩いているのか……………理解に戸惑う。

水無瀬に叩かれて不貞腐れた睦月は、水無瀬の傍に近付き……耳許で何かを呟いた。

「（小声で）水無瀬だって本当は」

「っ!？」

? 何を言ったのだろう……良く聞こえないけど、睦月の言葉に水無瀬は焦る。

「おい、天宮ちよっくら校舎裏まで来い」

「其れはやだ」

「即答かよ……」

水無瀬が決闘つけようとして、即座に断られた。

「因みに其所は私じゃなくて、杏か綾兎くんを呼び出すのが定義」

「んなわけあるかつ!! ……全く、何で何時も俺を捲き込むんだ」

「水無瀬だから」

「……はあ」

睦月のいかにも『腐』混じりの発言に水無瀬が呆れている。

相変わらず直球的なお気楽娘と弄られスポーツ男子のやり取りは見ている面白……然り気無く僕を捲き込んで欲しくないけど。

というか、どうして僕を捲き込
う。

いや、捲き込まれるんだろ

僕の人生って一体……………

二人を眺めていたところから更に離れ、空を見上げる。

「杏が現実逃避を始めましたっ!?!」

……………

……………

「杏、いざとなったら僕がついてますっ」

「……………ああ、綾兔居たんだ」

「気付くの遅すぎですっ!?!?!」

後ろから声がすると思ったら、いつの間にか綾兔が居た。

「いや……………そもそも、綾兔がそういう危険な発言をするから、天宮
が暴走すると思うんだが……………」

そして隣には綾兔の姉【す緋皇_{あま}亜梨栖】がいて、額を押さえていた。

肉親が危ない発言をするのは悩みなのだろっ。

雪代綾兎と緋皇亜梨栖は双子で、外見も瓜二つだ。

亜梨栖は特異体質なのか、髪は白く（ハリと艶があるので老人とはまた違った風格がある）瞳が紅い。

よく漫画等に出てくるアルビノ（？）って亜梨栖みたいなのを言うのかも。

その外見はまるで兎のようだと思うことがある。

腰の下まで伸ばした髪を黒いリボンでポニーテールにしている。

綾兎は黒髪で黒い瞳。今は短いけれど、本来の姿はサラサラロングヘアの外見は美少女だ。

二人がどうして色素と名字が違うのかは聞いたことはない。

ソコには僕が踏み込んではないものがあるから。

気になるけど……ね。

綾兎がグラウンドの隅にある芝生の上に腰を下ろすと、亜梨栖は芝生に膝をつけて後ろから綾兎に抱き付く。

まるで大切なモノを抱き締めるような仕草。

綾兎の肩口に顎を寄せ、力を抜く。

綾兎も亜梨栖に身を任せ、ちょっと恥ずかしそうに顔を紅潮させる……この光景は、何度か見た。

「ほわあああつ／＼／」

そして休憩していた生徒を和ませる存在となっていた。

二人は癒しキャラという認識をされ始めてる気がする。

そもそも、二人は【平凡な一般人】と異なるのだからもう少し自重すべきだと思う。

本人達は、自分が目立っているという自覚がないのだろう。

「亜梨栖……恥ずかしいです……」

「お前はワタシのものなんだから、此れくらい好きにさせる」

「……………（小声で）平たいものを背中に押し付けられても、嬉しくないのですが……………」

「おい、綾兔。今何て言った？」

亜梨栖の背後に黒いオーラが見えた気がする。

見なかったことにしよう……………

「おい、氷月。決勝戦出るぞ」

「あ、今行く」

僕は立ち上がり、声を掛けたクラスメイトの所に歩き出す。

……………決勝戦の相手は今まで練習を頑張っていたクラス。

少し……………チームの力を抑えるか。

「綾兔、お前も少しは氷月を見習えよ？」

「亜梨栖に言われたくないです」

決勝戦の試合を眺めながら、不意に聞かれた事にボクは返す。

そもそもボクと杏を比べないでほしい。

個々の存在の根本が違うのだから……………

「……………まあ、無理だろうがな」

「じゃあ、言わないで下さい。です」

断言。押し黙る亜梨栖。

ちょっと不貞腐れるとすぐに視線を外すのは相変わらずなんだから。

「……………綾兔はもう少し素直になれば良いのに」

「？何か言いました？」

「いや、別に」

ふいつと、遠くに視線をやる亜梨栖。

再開したときはほんのりとギクシャクした事があつたけど、今はあの頃　　離れる前と変わらず居る。

ボクはまた、亜梨栖の傍に居られる事が嬉しかった。

亜梨栖はボクの事をどのように思っているかは分からない。

かつて双子は意志疎通が取ることが出来ると言われた事もあるが、実際はなかなか難しく……性別も違うから女性ならではの事は余り察知出来ない。

『此処まで正反対なのに………』

本来の姿に戻った外見は然程変わらない。

亜梨栖はつるぺた同然だし、ボクは童顔………というか女顔だから………

声だつて中性的だし、腕だつてつるつる・ぷにぷにだ。

………つう、自分で考えて沈むなんて………ずーん。

「おい、お前はさっきから何をやってるんだ………」

「ブツブツ……………どうせボクに男らしい所なんて……………」

呆れ顔でボクを見つめる亜梨栖の視線が痛い。

心の中で無意識に自分を励ます言葉を反芻する事およそ五分。

『……………それでも、杏よりはマシですよねっ』

杏と自分を比べ、自分の方が若干男らしいんじゃないかと思う事に、
理不尽だけど、そんなのもアリだろう。

校庭の中心で、周りの動きを見ながらのロングシュートを飛ばす杏。

20人強の人数の中で水無瀬さんと共に一際目立っている。

本人は自分から目立つのを嫌がっているが、どう見たって目立っている
んじゃないかと思えます。

男女共に視線が杏か水無瀬さんに行ってますし……………最早聖桜（
此処）のアイドル状態ですね。

そういえば亜梨栖が学校に転校した日、天宮さんの……………えと……………
……………ぼーいずら……………ぶ（？）というジャンルの小説が、人気ラン
キングで一位になったとき……………物凄い量のファンレターが杏の下駄
箱に入っていましたっけ……………

天宮さんの小説の主人公モデルになっただけじゃないのかもです。

もしかして杏が良く現実逃避に走るのはこれが原因だったり……
…？

「あたふたしたと思ったたら急に黙ったり……お前は変わったな……」
「え………」

亜梨栖の言葉にハッとす。

「ワタシにも警戒していたくせに。気が抜けたというか………お
前らしくなった」

「ボク………らしく？」

其れは一体どういう事だろう。

「………お前が気付かないなら気付くまで足掻け。そうすればお
前も………」

「亜梨栖………？」

なんだろう、この違和感。

前はそんな事は言わなかったのに……

何かが亜梨栖を変えてしまった……

何が………亜梨栖を………

ボクと別れた二年の間に亜梨栖を変えてしまったもの。

其れはもしかして

いや、取り敢えず聞こう。

「亜梨栖……………あの」

「綾兎……………【クロ】はどうしてる？ あの後は何もないか？」

「【クロ】……………？ ………………あ、すっかり忘れてました」

「忘れるなよ（汗）」

急に違う話題になったので直ぐに理解できずにいる。

【氷月杏】という存在に出逢ってから、ボクの日常は変化した。

其れは【ボクの存在】に必要な不可欠なモノを忘れさせるくらいに……

「亜梨栖の【シロ】はどうですか……………？ 【彼の時】以来、変化はないですか……………？」

「嗚呼、大丈夫だ。【彼の時】以来静かだよ……………恐ろしい位にな」

「【クロ】も同じです。遭った事を考えると仕方ないのかもしれないですね。世界の為にも……………」

「……………そうだな」

亜梨栖の表情が曇る。

ボクもそんな亜梨栖から視線を反らした。

暫く考え、やがて一つの考えに辿り着く。

そして亜梨栖に……………雪代綾兔という存在に言い聞かせるように口を開いた。

「……………其れでも、【今度こそ】は世界を壊さないようにしないと……………」

其れは片割れを失うことと同等に怖いこと。

過去にしたことで分かっているから……………だから、もう二度と……………あんな思いはしたくない。

だって、其の為にボクは……………

「余計なことは考えなくていいぞ。前だけ見て歩け」

「……………前だけ見てたら落下物に気付かなくて大変ですよ？」

「……………ぷっ。あははははっ」

亜梨栖の発言にザックリツッコミを入れると、苦笑気味に笑いだす。

ボクの言葉に可笑しいところでもあったのでしょうか……

「はははは………は………あー、久しぶりに思いっきり笑ったよ」

「何がおかしかったのか全く理解できないのですが………まあ良いです。」

「お前はもう少し砕けた話し方は出来ないのかよ」

「例えばどんな感じにです？」

「そつだなあ………んー………」

「よし、これから私の事を『亜梨栖おねえちゃん』みたいに言え」

「嫌ですよっ！！ 断言しないで下さい………」

亜梨栖………二年間の間に一体何があったのですか？

ボクには理解できないのです………

ボクが頂垂れると同時に試合終了のホイッスルが鳴り響く。

杏はその中で嫌そうに水無瀬さんとハイタッチを交わっていたのであった………やっぱりなんだか狡いです。

間に割って入りたいほど……………狡いです。

途中で試合にストッパーをかけようとしたら水無瀬に気付かれてしまった。

相変わらず目敏いんだから。

水無瀬の掌の上で踊らされていた感覚。

名前を呼ばれると思わず反応してパスを受けてしまい……………負けず嫌いな気持ちからか……………ゴールにシュートを決めてしまうのだ。

ネットが所々焼け切れ、使い物にならなくなっているのは見ないことに……………僕のせいだけど、そう思いたくない。

それにしても、何で僕のクラスが優勝するんだよ……………はぁ……………ややこしい事になりそうだ。

因みに当の本人、水無瀬を見ると物凄く満足げな表情をしていた。

……………やっぱりサッカーが好きなんだなあ……………

正直、何かに没頭してられる人を僕は尊敬している（注：薬物・墮落な生活関連除く）

なんというか羨ましく思えるからかな……

「ん、なんだ？　とうとう杏もサッカーに興味を持ったのか？」

「んな分けないでしょ。……まあ」

「まあ？」

「……………コンビネーションだけは認めてあげる」

人を褒めるのはなんだかくすぐつたい感じがする。

というか、表彰台の上に何で水無瀬と一緒に居なければいけないの
だろう。

「よし、これからサッカー部に」

「其れは却下。誰がやるかつ」

「……………ぐすつ、良いもん。幽霊部員には登録してあるんだから

……………」

「さっさと取り消してくれないかな……………（怒）」

長身のサッカー馬鹿が女々しい口調になるな。

水無瀬がぶつくさ言ってる事を軽く受け流しながら、ふと考える。

相変わらずの水無瀬とのやり取り。

これが当たり前で、僕の一部になっていて。

だからこそ時々不安を感じる。

僕はもしかしたら失うのが怖いのかもかもしれない。

只の人間ではなくなって（元から異端者らしい）、非日常に変わったなかでも残っていた【当たり前の日々】を。

其れが無くなったら、僕はどうなってしまっただろう。

僕は僕のままに居られるのだろうか……

いや、そもそも【僕】は

感情が沈む。

心の中にある闇に。僕の逃げ場に。

辛かったら足掻かない。諦めそして……受け入れる。

何もかも全て。

今までそうしていたのにどうして時々無意識に足掻こうとしてしまっただろうか。

関係ない人を捲き込んでまで世界に残るつもりはない。

逃げては……ならないのだから。

其れでも僕は、本当に自分がしたいことを出来るのだろうか……

「う……きょうつ……杏っ!!」

誰も傷付けないうで存在出来るのだろうか……

「おいつ、落ち　　ったくっ!!」

ガシッ「……うにゃっ？」

不意に底から無理矢理引きずり出され、現実に戻る僕。

気付けば視界が少し薄暗かった。

仄かに香る汗の臭いと皮膚から伝わる温もり。

背中越しに伝わる感覚が、誰かが僕を抱き締めてくれてる事を教えて

……え？

何か……変だ

「「ぎゃあああああつ／＼／＼」うおおおおおっ!?!?」「

「っー!？」

「……………やっぱりこうなるのか……………杏」

「な、何？」

「……………降ろすぞ」

「え……………？」

ストツと足から伝わる地面の感触。

顔との距離が広がり、少しホツとする。

「全く……………ぼんやりしてたと思ってたら表彰台の段から足を滑らすなんて……………俺じゃなかったら今頃怪我してたぞ？」

「うん……………地面が消えた感触がしたから吃驚した。ありがとう」

フワリと微笑むと、周りから歓声が上がる。

特に女子の方が……………水無瀬とB.L.フラグを建てた覚えが無いのだけ
ど……………

微笑みを苦笑に変え、水無瀬を引き連れクラスメイト達の元に戻る。

水無瀬と僕だけで掴めた勝利じゃないから。

だから皆で

以前だったら考えられなかったこと。

表面上の付き合いかもしれない。

だけど それでも

『今を大事にしよう』と思うんだ。

其れが今一番の僕の願い。

其れを叶えるために僕は自分のできる範囲で【現実世界】を護るんだ。

光と闇の両立が保てるようになれば、僕の役目は終わ

「杏」　とうとう水無瀬とくつつく気になったんだねっ

「ボクとはあんなにくつつかないのに狡いです」

「いや……だからな綾兎。頼むからB.Lそっちの世界には踏み込まないでくれ……」

……綾兎達三人に次々声を掛けられ固まる僕。

「あはははっ」

「「「???」」」

「杏、大丈夫か? とうとう壊れ ぐふっ!?!?」

ぐりぐりと余計なことを言おうとした水無瀬の腹部に肘鉄を打ち込み黙らせる。

個性溢れる大事な人達と非日常な世界で居るのが、こんなにも楽しい。

ゆるゆると空気が抜けていて、時々サプライズがあつて。

……………世界を護り終わるのは、もう少し先伸ばしにしよう。

迂濶にも僕はそう思ってしまふのだった……………

そう、この時は分からなかった。

僕達は偶然【此処】に居ただけなのに。

路^{みち}が重^{おも}なって繋が^つって

それはまるで鎖のように、深く繋がっていくんだ……………

第一章〈始まりの朝は何時も非日常だから、なんとかなりませんか？〉（後書き

お久しぶりです。椎菜です。

暫くの間……えっとスプラッタ？……じゃなくて……クラ プ……
スラ…… スランプだっ！！

にどっぷり嵌まってました。

おかげさまで7ヶ月掛かっています。

なので前回以上に文章が統一されてない（……）

ぶっちやけキャラ達変わってます。

……なんかすみません。

学生じゃないと中々書けないものもあるんですよ（断言）

まあ、こんな作品になりましたが楽しんでいただけたら幸いです。

つまらなかつたら諦めてください。

仕事の関係上、余り執筆出来ないので緩やかに書かせて戴きます。

宜しくです。

第二章　桜の君は何を思っつゝ

「暑い……」

ここ暫く続く茹だるような暑さの中で僕はぐったり。

窓側の席は、カーテン閉めても暑いです。

少しでも心地よい風があるのが唯一の救いだろうか……省エネだとはいえ、エアコンが導入されているんだから使ってほしい。

『熱中症になったら誰が責任取るんだろうなあ……』とか考えてしまう。

ま、熱中症は小まめに休息取って水分をしっかりと摂れば大半は問題無さそうだけど。

それでもって、室内だからって油断はしないけど。

梅雨が明け、7月。

又の名を文月。

文を書く月という名が合っているように世間一般・勿論此処、私立聖桜高校では期末テストが有り……球技大会後日、期末のテスト返却で授業の殆んどが潰れている。

今は授業中だけど、テスト返却後に放送が入り、先生達が職員室に

呼び出され自習になった。

一学期の成績を決める時期でもあるから仕方無いのだろう。

しかし、職員全員が呼び出しって成績を付けるにあたって、何らかの問題があつたのだろうか。

他の学校に比べ、校則がほんわりしてるので……………滅多なことでは緊急会議は行わないのだけど……………？

で、その間僕は一体何をしているかと言うと

「杏、此方の終わつたら次はこの校正宜しくっ」

「睦月、小説の校正は自分でやるべきじゃないのかな……………」

『はあ…………』と溜め息を付き答案用紙をクリアファイルに入れて鞆に仕舞い、赤のボールペンを片手に持ち……………僕は勝手に（そして無造作に）机の上に積まれた原稿に向き合っていた。

「其れどころじゃないのは見て分かるでしょ？」

積み重ねた作品にざっと目を通しながら、睦月の手元にある答案用紙と課題を見る。

今回のテストで出された課題の範囲は参考書一冊分らしい。

一科目が、だ。

見る限り四・五冊はあるよなあ……

更にコピックやらホワイト、イラストの道具も持ち込んでるし
売れっ子も大変なんだな。

其れでも此処は学校で本来は学業に励む場所だ。

仕事と学業は一緒にしてはいけないだろう。

そもそも、原因は

「普段ちゃんと勉強しないからいけないんだよ」

ポツリと呟いた言葉。

其れが睦月の地雷を踏んだ。

「なによ、杏は化学赤点スレスレだったくせにつ！！」

「それ以外は平均より上だから問題なしだよ。赤点はないし。睦月
よりはマシ」

校正作業を続けながら、思い出す。

確かに化学は今回、授業に出なかったところが多かった。
その場合は今まで習ったことを生かして取り組むしかない。

だからって、大学入試に出た問題をやらされては堪らないけれど……
……ね

お陰でクラスの平均点が赤点手前だった。

僕もそうだったけれど、クラスの平均点は取れていたし……

しかし、『そんなの想像力でカバーだよ』と言っていた睦月は
見事満点だった。

だけど

「ど……どうせ数学と英語は皆無だもん。二桁取れただけ今回はマシだもんっ。零点ないしっ！ー！」

「其れで断言しないでよ………」

最早答える気にもならない回答。

呆れを通り越して同情心すら湧いてくる。

同情しても、勿論そんな点数は取りたくないけれど。

というか、化学の時に役立った想像力は何処に行ったんだよ。おい。

そして数学と英語以外にも赤点あるだろ。

「何処が平均点なのよ……何時も一桁台の順位に居るじゃない……」

キツと恨めしい視線を浴びせられる。

……まあ、化学以外は殆んど90点より上だからね。

下手に点数落として親に干渉されたくないし。

理音母さんには特に………想像すらしたくない。

「確か今回は勉強会も一回だけだったし、睦月は仕事も抱えてたから余り勉強出来なかったんじゃないかな？ だったら次回」

「次回よりも今頑張らなきゃいけないのっ」

「……だね」

「ごもつともです。」

「あーもーっ！！ 綾兎くんが居たら、『睦月さん、一緒に間張りましよう』とか言ってくれるのに………杏はツンデレっ子だから優しいこと言ってくれないし」

「手伝うのやめていい？」

「………見捨てるの？」

さっきまでの元気とは裏腹にしゅんつと頂垂れる。

「が、頑張ればいいと思うよ………？」

流石に酷いこと言ったかな。

ちよつと儂げに言ってみる。

すると睦月は『その言葉を待ってましたっ!!』とばかりに含み笑いをするものだから……うん、要するに僕は睦月に騙された訳だ。

「と、兎に角私は今は勉強を頑張るから、杏は小説の校正やってっ。自分でやるよりも誰かに見てもらっ方が効率良いし」

其れは確かに思う。

昔、小説書いていたときは部活の顧問に見てもらってたし。僕に頼むのはこれが初めてじゃないしね。

「了解。分からない所があったら聞い

「じゃあ、全部っ

「……さて、ここの文章は……っ」と

睦月の瞳が輝いた。

恐いので無視。

赤線を引きながら、気になる文章をチェックする。

「さらっとならないでえ　　っ!!」

「お前ら五月蠅いっ!!」

睦月が叫ぶと同時に怒鳴り声が入る。

僕の幼馴染み・水無瀬の声だ。

む、最近では綾兎や亜梨栖が合間に入ってくれるから話の流れが変わってよかったのだけだ。

因みに今日は二人は欠席している。

亜梨栖が聖桜に転入してきたからか、綾兎と供に別の所に住むことになり、今日は引越しする準備をするらしい。

二人がいて盛り上がる事が多いため、一寸寂しい。

話を戻すと、今日は二人が居ないので以前みたいに水無瀬がツッコミ役を買って出てくれたみたいだ。

別にどうでもいいんだけど。

「全く……自習時間位静かにしろよ」

ブツブツ言いながら、僕の隣に来る。

わざわざ来なくていいのに……

「珍しくマトモな事をいったね……謝る気は無いかねど」

「無いのかよっ!」

「さて………続きっ」と

仕事に向き直る僕

「杏……無視するなよっ!!」

何時もは騒がしいのに今日は静かだったから、存在を認識してなかった。

一瞬水無瀬が握っていた答案がちらりと見えた。

【歴史 2点】

水無瀬……何時もは高得点なのに一体何があったんだよ……

僕の視線に気付いたのか、気まずそうに俯きながら水無瀬は口を開く。

「実は二問目から解答ずれて書いてた……」

「え、一寸見せて」

「……ほらよ」

水無瀬から受け取った答案用紙と解答用紙を見比べる。

……あー、可哀想に

「わあ……ずれなかったら、八十点は取れたみたいだね……はい、返す」

「苦笑いしながら返すなっ!!」

本当に肝心なところで失敗するんだよね。水無瀬。

「ま、天宮よりはマシか。どうしようもないからな。マジで」

ハツと鼻で笑いながら睦月を見る水無瀬。

「……残念なイケメン・水無瀬さんが言える状態じゃないよね？」

「其れだけはお前にだけは言われたくないんだがなっ!! 美少女
ダメ作家・天宮には」

……相変わらず、二人の相性は悪いらしい。

一寸したことで直ぐに喧嘩になるんだから。

確か発端は睦月が勝手にBL小説に水無瀬がモデルのキャラを出したからだったっけ………？

根本が違うから仕方無いのか。

「なによっ!!」

「なんだよっ!!」

「………褒めてるのか貶しているんだか分からない罵り合いだ……スルーするね」

二人の口喧嘩の時は出来るだけ距離をとるようにしている。

正直、捲き込まれたくない。

僕は鞆の中からDAPを取り出して、イヤホンに付け音楽再生スタート。

緩やかなテンポの曲が流れ出したのを確認してから校正作業に戻る。

さて、何故こんな事になったかというところ……実は早朝に睦月の担当さん（確か名前は久寺家早苗【くじけ・さなえ】さん）からヘルプの電話を貰い、作品のチェックを頼まれたからだ。

久寺家さん……神経性の胃炎で暫くベッドから動けないらしい……電話の声も呻き声にしか聞こえなかったし……うん、この際無理はしないで養生してほしいものだ。

睦月が何時もお世話になります（脳内でお辞儀）

原稿は僕のチェック後に、睦月自身が出版社に持ってくらしい。

序でに病院にも行ってくるみたい……

逆に症状悪化させなきゃいいけど。

我儘睦月に付き合ってくれてありがとうと伝えたい。

あ、因みに今は一般小説（学園舞台の青春もの）とBL。挿絵数枚とカラー数枚。夏コミ用の小冊子分の原稿。挿絵やカラーは無理だけど、自分自身が小説を書いていた経験があるし、睦月と親しくなってるからは仕事を手伝うことがあるから……大体の流れで分かるようになった。

チェックした原稿も、僕 担当（久寺家さん） 編集長の順に三回
チェックされているので、僕が見逃してもなんとかなるみたい。

今回は僕 久寺家さんを飛ばして編集長さんが見るらしい。

編集長さんは滅茶苦茶凄腕のベテランさんなので、大丈夫。

補足だけど。睦月の仕事を手伝うときは、基本は食事代のみ払って
もらってる。

但し、泊まり込みで修羅場を手伝わされる時は、ちゃんとアシスタ
ント代が振り込まれる。

ボランティアでやるには内容が許容オーバーだし、アシスタント代
と言っても実際のアシスタント代より安いらしい（時にはバイトを
休むこともある為、お金を貰えるのは大変助かる）

それが僕と出版社の関わりだ。

……まあ、それ以外にも出版社には中学時代に小説を投稿して
たり、知り合いが居たり一寸は接点あったが。

「水無瀬のばーか、ばーか、スポーツばーかっ!!」

「天宮、女だからって容赦しないからなっ!!」

「は？ 掛かってきなさいよっ。水無瀬なんか鬼畜DSにでもなっ
て （以降・内容に僕が含まれることがあるので精神的に
自主規制）」

……DAPの音量を上げ、余計な雑音はシャットアウトする事に。

僕は暫くこの作業に没頭することにした。

……睦月と水無瀬は時折存在自体が禁に掛かるときある気がする。……将来、絶対損するだろうなあ。

数十分後

カタカタッ

「？」

ある程度作業が進んだ所で不意に小刻みな揺れを感じ、作業を中断する。

イヤホンを外し、『二人の争い終わったかな……』と辺りを見回す。

「……つて、あれ？」

何時の間にか、教室から二人は居なくなっていた。

というか、何故だかクラスメイトの殆んどが居なくなっていた。

えっと……一体何があったんだ……？

ふと、視界に誰かが入る。

唯一残っていたのは……………ほんの少し離れた席に座ってる
本宮桜果【もとみや・おうか】だけ。

……………桜果だけ。

大事なことなので二回言いました。

……………う、気まずい。

桜果は席で読書をしながら、片手で携帯を弄っている。

集中はしていないらしく、時々手が止まっているように思えた。

はっきりは見えないけれど……………斜め後ろは見辛い。
其れはさておき。

実は本宮桜果は……………僕の双子の姉として育てられた従姉だったりする。

四歳くらいから中学三年迄一緒に過ごしていた。

しかも僕は桜果に首を絞められ、殺されかけた（詳しくは前作参照）
経験もあり、更には二年程関わりがなかった。

僕自身、母さんに『桜果は死んだ』と責められていた位だし（何故
母さんがそんな事を言っていたのか理由は定かでないが……………彼
の人の事だから僕を傷付けるなら何でも構わないのだろう）

だから、桜果と再開してから殆んど話していない。

そんな相手とどうやってマトモに話す事が出来るのだろう……

「……………意外に此の話、良くできているわね……………」

「え？」

ふと漏れた呟きに思わず反応する。

「……………キョウ、これは事実なのかしら？」

読んでいた本をパタンと閉じ、ジッと僕を捉える桜果の視線。

「……………なんのことかな？」

なんとなく嫌な予感がしてきた。

抑桜果は一体何の本を

桜果は僕の考えを察したのか「ああ……………此れ外せば一発ね」と呟き、茶色いブックカバーを外す。

「うつ！！？」

「じゃーん。天宮さんに戴いたの。……………私の居ない間にキョウは知らない世界を……………くふ」

「『くふ』とか言って鞆にしまわないでーっ！！」

……相変わらず僕を弄るのが好きなようだった。

本宮桜果・恐るべし。

「それでも、創作で此処までとなると………現実はずっと凄いかしら？」

「そんなわけないから」

「『水無瀬とイチヤイチャしたいっ！！ だけど此処は学校………：うっん、それでも微笑みかけてくれるだけで僕は満足。だって僕は水無瀬が』 みたいな感じかしら？」

「違うからっ！！ 僕の声を真似して言わないでっ！！！」

「くすっ。冗談よ」

恍惚な表情をしながら言う桜果。

嗚呼、こんなやり取りばかりだったっけ……

「………ま、本当に水無瀬が杏に手を出すようならわたしが止めるけど」

「………じゃ、睦月ワールド語らないでよ………」

はぁ………と溜め息をつく。

睦月め、何で桜果にソッチ系の本を渡すんだよ………

「これは創作なのは分かってるからそんなに発情しないの」

「発情って……女の子がそんな事言っちゃいけませんっ!」

他にクラスメイトが居なくて良かった。

こんなやり取り見られたくない。

「キョウ……疲れないの？」

「誰のせいだろうっねえ……もう知らない」

ふいと顔を反らす僕。

桜果なんて知らない。

無意識な暗示のようにその言葉が浮かぶ。

心から拒絶すれば良いのにそれはなかなか上手くいかなくて……
…何でなんだよ。

人の事を散々からかって何が楽しんだよ。

桜果も……母さんも……

そっだ、傷付く位なら関わらなきゃいい。

でも関わってしまう……そんな僕自身の性格が歪んでいるのは自覚している。

今までの経験上、歪まなければいけなかったから。

いや、歪まない方がおかしかった。

せめて桜果が僕の両親の娘で僕が違うのなら理解できるのに。

何処で間違ってしまったのだろう………

昔みたいにまた桜果と仲が戻ったら………母さんと桜果から弄られる日々が戻る。

其れは一種のコミュニケーションかもしれない。

其れが僕は耐えられなくなっている。

だって、操られていたと理解したけれど。

穏やかだったところから急に突き放され、ポロポロになれば………誰だって思う。

大切だった物でさえ、拒絶したくなる。

………誰だって？

桜果も？

あれ………僕は桜果側の気持ちを考えてた事は無かった。

桜果はどうしていたのだろう。

此の二年の間、綾兎に出逢うまで僕は世界から興味を失っていた。

坦々と与えられたことをやり、あまり自分から動くのを止めた。

桜果は……桜果はどうだったんだろう……？

昔は姉弟として育ち、今は従姉という関係。

氷月家に引き取られたと知ったとき、桜果は……暫くの間、塞ぎ込んでいた。

和解しても、以前の関係に完全には戻れなかった。

更に、操られて僕の首を手をかけたとき、桜果には意識があった。

桜果はそのときの事を憶えてたとすると……其の後の生活に影響があったんじゃない……

「桜果の手首……大丈夫だったの……？」

「唐突に話が変わるわね。しかもディープだし」

「しゅめん」

「謝らなくていいわ。キョウウの顔を見れば想像つくから」

「……………」

「解答するわ……………大丈夫じゃないわよ。日常生活に殆んど影響ないとはいえ、フルートはもう吹けないわね。複雑な指の動きと楽

器の重さが負担になるみたい。演奏中に何度楽器を落とした事か……
……他の楽器も出来ないし、オーケストラの夢は諦めるはめにな
ったわ」

「あの時の事は……？」

「殆んど憶えているわ。知らない声の持ち主に身体を乗っ取られた
事……全部。アリスが真実を教えてくれたから理解できたけど、
理音さんがわたしの事を死んだようにキョウウに言ったことは……
……理音さん自身がわたしと母さん……【千桜】さんを重ねたのかも
知れないわね。誤解を招く発言だからやめてほしかったのだけど」

「アリスが？ 何で？」

「視たらしいわ。過去を。勝手にやってしまったから、プライバシー
の侵害でお仕置きしたけど」

「お仕置きって……え」

「なあに？ キョウウもしてほしい？（微笑）」

「お断りします」

亜梨栖……止められなくてごめん。

おもわず目を伏せる僕。

「もう一つ質問。……ね、桜果と母さん
最近まで一緒に居たんだよね？」
理音さんはい

「え？ また唐突な話ね…… そうね…… 悪いけれど、一緒には居なかったわ」

「え？」

意外な言葉に僕は驚く。

「ほら、わたしは名字が【氷月】から【本宮】に変わったじゃない。【本宮】はわたしの本来の名字だから…… 実はあの後直ぐに本宮の家に引き取られたのよ」

「そう…… なんだ」

知らなかった……

「元々、理音さんとわたしの母さん【千桜】^{ちばな}が勝手に造った誓約があつて…… 其れに基づいて氷月家に居たものだったから。もしお互いに何かあつたときは其の子供を育て上げるという…… ね」

本人の意思を関係なくだから堪らないわよね、と桜果は付け加える。

確かにそれは言えるかもしれない。

もし…… もし千桜叔母さんが亡くなっていなかったら、一緒に暮らすことは無かつたのだから。

「誓約があつたにも関わらず、本宮…… つまり父方の家に引き取られたのは、本宮家の次期当主が亡くなったせいだけ…… そんなこんなで最近までゴタゴタしていたから、なかなか戻れなかつた…… まあ、聖桜【ここ】に来られるように条件出せたのは

有り難かったわね。本宮家は由緒ある家だし」

「其れで……………其れで良かったの？ 桜果自身の意思是？」

「その辺は気にしなくて大丈夫よ。帰宅時の寄り道は許されているし。常にSSシークレットサービス……ボディーガードが付いているのは厄介だけど……………気にしなければ良いだけだし」

「え」

じゃあ、今も何処かで桜果を見守って居るの！？

キョロキョロと辺りを見渡す僕。

だけどそれらしい人は見当たらず

「あ、天井の何処かに潜んでたりするらしいから、捜すだけ無駄だと思っわよ？」

恐っ！！

「ね？ 杏の事どう思っかしら？」

天井に向けて声をかける。

数秒後、桜果の携帯が鳴った。

「ほら、直ぐにメールが来たわ」

携帯を開く桜果。画面を見てみる。

「本当だ……………内容はええと……………お嬢。氷月家の御子息には猫耳が似合いそうです」……………っ!？」

「流石わたしのSS。よく分かってるじゃない」

「いや、何が!？」

冷や汗が止まらないだけ。

変態視点で見られるのは気が引ける。

確かに桜果と気が合いそうなSSだけど……………良いの？

SSって変態もなれるの？

「キョウにニャンニャン御奉仕させてみたいって言ってるわよ？」

「其れは桜果が僕にさせたいことだよねっ!？」

ピリリッ

『流石お嬢。気が合いますね。御子息、如何なさいますか?』

「あんたも答えるなっ!! 良いから今すぐ業務に戻ってくださいっ!！」

天井に向かって叫ぶ僕。

精神面が犯されそうだよ……………絶対に桜果のSS、ドSだ。

「出そうよ？ 仕事の邪魔して悪かったわね。礼は帰ってからするわ」

ピリリッ

『有り難き幸せです。お嬢。オレは仕事に戻らせて戴きます』

「そ、ありがと。返信は要らないわ」

「色んな意味で凄い方だね。SSさん」

「見返りとお給料の額がね……………その代わり、何でもできるから助かるわ」

「成る程。だから桜果が変わらないのか」

「キョウ？ 一体どういう意味かしら？（黒微笑）」

「……………ひゅー」

「ちっ」

発言に気を付けるから舌打ちしないでよ……………全く。

「それは置いといて……………と。ま、わたしは自分の意思で此処に来たって事だけ理解してくれば良いわ。キョウに逢いたくって、此処に居るんだから」

「っ／／／」

そうやって……真っ直ぐ僕を見つめて微笑みながら恥ずかしい事を言われると……

嗚呼もう、どんな顔をすれば良いのか分からないじゃないか……うう

「ほんと　　キョウって可愛いわねえ……ね、愛でていい？」

「恥ずかしいので勘弁してください」

「そう、この感覚よっ。二年近く堪えてきたかいたわ。亜梨栖で代用してたけどやっぱりキョウがいつっつちばんっ。弄

愛でるにかぎるわっ」

「おねーさん、今本音が聞こえましたよ？　弄るのは止めて下さい
全く………ほんっつっつとに根っこは変わって無いのだから。

ちょっとイラッとすることもあるけれど、こんな風に話せるようになったことは嬉しくて………凄く懐かしくて。

上手く言葉に表せないけれど、なんかこういうのって凄く良いなと思えてしまった。

「ん、満足　　照れたキョウをもう少し眺めていたいけど、そろそろ水無瀬と天宮さん………他の方も連れ戻さないと次の授業に間に合わないんじゃないかしら？」

「あ、そうだね。………えっと………二人は何処に？」

「ほら、彼処」

照れ隠しながら窓際を指差した桜果と共に外を見る。

校庭に不自然に土埃が立ち込めていた。

「校庭で鬪ってるわよ。見る限り天宮さん……………法律に引っ掛かりそうな物を武器にしているわね。大丈夫なのかしら？」

其れを聞いて僕は青くなる。

あまりよく見えないけれど……………確かに睦月の手に……………モザイクを掛けなければいけない・非核三原則を破って持ち込まれたらしき物が握られている。

これは不味い。

睦月の事は久寺家さんに頼まれているんだから。

聖桜は公にしないように配慮しているから兎も角、一般市民に見られたら睦月の評判に傷を付ける事になる。

其だけは何としても避けなければ

「別に水無瀬はどうなったっていいわね。キョウウに傷を付けそうだし 水無瀬なんか、四肢を切り刻んで穀物の糧に……………」

「……………」

物騒な言葉が聞こえたけれど、あえて聞かなかった事にする。

いや本当にそうしたい（心から）

水無瀬が居なくて良かった。

居たら本当にやりそうなんだもの……………身内から犯罪者は出したくない。

「さて、じゃあ止めに行きますか」

溜め息を付きながら、二人で教室を出る。

「そうね。キヨウ、天宮さんはわたしが何とかするから水無瀬をお願いね？」

「え、睦月は兵器魔……………鬼だよ？ 生身の桜果じゃ危険だつてっ！」

「あの栗鼠みたいな娘がキヨウの中では兵器魔なのね。天宮さん、可哀想。その心をわたしが癒してあげる」

あの娘が墮ちるのは時間の問題だわ。

そう聞こえた気がした。

思い出した、桜果って……………百合気味だった。

「違うわ、可愛いければ綾兔やキヨウも許容範囲のバイよ？」

「僕も許容範囲の変態になったんだね……………」

遠い目をする僕。

そう言えば、【闇の災厄】と呼ばれているあの日も、桜果は僕の入浴シーンを覗いていたんだっけ……………」

「というか、廊下を歩きながらする会話じゃないよね。生徒達の視線が痛い……………」

「気にしなければ良いのよ。嗚呼、【お姉様】とか【桜果様】とか呼んでくれる可愛い娘は居ないかしら？」

桜果の問いに一斉に目をそらす生徒達。

これはこれで面白い？

「僕は呼ばないからね。あ、なんなら『変態のおねーさん』って呼んであげる」

「消えたい？」

「嘘です。冗談です。だから逆手に握って首に突きつけているシャープンポケットにしまってください」

一体どこから出したか分からなかった……………運動神経が高まったのだろうか。

「仕方無いわね。貞操に手を出さなかっただけ安心しなさい……………」

ふふっ」

シャーペンを胸ポケットにしまいながら、暗い笑みを浮かべる桜果。
何を考えているから想像しないようにしよう……………精神衛生上……
……………ね。

階段を降りながらこの後どうやって二人を止めるか考える。

水無瀬には飛び蹴りか踵落として良いとして……………桜果はどうやって睦月を

「さてと、クロロホルムは用意してあるから……………ハンカチに染み込ませてつと……………口を塞げば此方のモノよ……………」

「明らか誘拐犯がやりそうな事するつもりだよねっ!？」

「大丈夫よ……………(小声で)いざとなったらキョウが責任とればいいし」

「やっぱり桜果、嫌」

「?」

カチカチッ

シャーペンの芯を出す音

首筋に何かが突きつけられた

「……………すみませんでした」

「分かれば良いのよ」

やっぱり桜果には逆らえない。

そんな事を染々と感じる事が出来た日だった。

*

「はあ……………はあ。みーなーせー、いい加減倒れてよっ……！」

「お前の攻撃受けたら死ぬだろうっ！！ 手榴弾投げるな。校庭にトランプ仕掛けんなっ……！」

『『この二人の闘いは何度見ても飽きない(ぜ)(な)』』

クラスメイトが見守る中、校庭には土埃が立ち込めクレーターのような穴があちこちに空いていた。

強い日差しの中で熱中症の危険性があるのにも関わらず、誰一人教室に戻ろうとしない。

それだけ美少女作家とスポーツイケメンの闘いは刺激的で……………バイオレンスなのだ。

「ふっふ〜。かかった側が負けるのよ？ あたしは勝つ。そして杏と綾兎くんのBLを執筆するんだもん」

「はあっ！？ そもそも何で俺達闘ってるんだよ……………」

水無瀬は喧嘩の意味を気にし始めたが、見ている側には関係ない。

この二人のやり取りは名物といってもおかしくない。

だから窓側に座っている生徒の殆んどが目を奪われている。

「いいじゃん。勝った方が相手の言うことに従って、ご飯を奢ればって条件で〜？」

これで闘いが更に面白くなるのを眺めながら、安全地帯での鑑賞を続けることにする　　ん？

瞬間、ぶあつと強い風が横切ったような

「よく分からないがそれでいいか。よっしゃ、闘いはこれからだ」

「うりゃっ」

ドスッ 「げはっ!？」

「ふう…………と。よし、決まった」

「…………?」「…………?」

いつの間にか氷月が現れた。

「え？　なにが　　もが!？」

「二人とも、其処までよ」

「「本宮……さんっ!!?」」

「本宮の　　がくり」

「あ、あま………みゃ………」

バタリと倒れる水無瀬。

鳩尾に強烈な蹴りを受ければ仕方無い。

首謀者の氷月の顔は、スッキリとした表情で。

天宮もぐったりと本宮の豊満な胸に頭を預けてる。

天宮を優しく抱き締める本宮は……満面の笑みを浮かべていた。

「キョウ、天宮さんを保健室で介抱してくるわ」

「おねーさん、スツゴク嬉しそうだね。ほら、水無瀬行くよ？　ク
ラスの皆も……戻ろっか？」

「「「そ………そうだね（そうだな）………」」

天宮を軽々とお姫様ダッコして保健室を目指す本宮と、ずるずると水無瀬を引き摺りながら、教室に向かう氷月が怖い。

『『氷月と本宮には逆らわないようにしよう』』

クラスメイト達が心の中でそう決めたことは、当人達は知るよしもなかった。

*

「でも……………さっきの言い方、まるでキヨウなら生身でも大丈夫みたいって言ってるようなものだったわね　　おおよそは察しがつくけれど、綾兎くんが原因なのは確かかね…………キヨウ…………貴方は変わらないわよね……………」

天宮さんを保健室のベットに寝かせ……………彼女の制服のリボンを外す。

ブラウスの釦に手をかけながらわたしは呟いた。

此処まで変わってしまったわたしに変わらず接してくれたキヨウ。

「もう無理だと思ったけれど、なんとかなるもの……………ね」

ブラウスの釦を外し終わったわたしは、自分のブラウスの釦を外して彼女の隣に潜り込み　　無防備な彼女の頬に口付けをする。

「ほんと、無理矢理眠らせてしまったのに罪悪感を感じさせない程

ぐっすりね……………仕事と学業を両立させているんじゃないか
女の子は可愛い。

特に純粹で純情な　　そして心に闇を飼っている娘は汚したくなる。

ギシッ

天宮さん以外居ない保健室。

先生も今日は休みの為、鍵を借りて中に入った。

スプリングが軽く効いてるベッドの上でわたしは

「抱き締めても……………気付かれないわよね？」

掛け布団を被り、天宮さんを軽く抱き締める。

彼女を寝させる前に、窓を少し明け、カーテンは閉めた。

天宮さんから甘い香りがする。シャンプーかしら？

「キョウに心配はかけてないのだけど、アリス達が言う【闇の災厄】以降……………ナルコプレシーに近いものを患ったのよね。バレないようにしないと……………あ」

ズンッ　来た。不意に意識が切り離される感覚。

「天宮さん……………貴女も縛られてるのね。貴女となら……………立場は

似てるから分かりあえるかしら………？」

もしかしたらわたしは天宮さんに憧れて要るのかもしれない。

フツと意識が飛ぶ。

僅かに彼女を抱き締める手に力を込め、わたしは意識を手放した…

………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6435v/>

絆～導く二つの廻る螺旋～

2011年12月11日20時47分発行